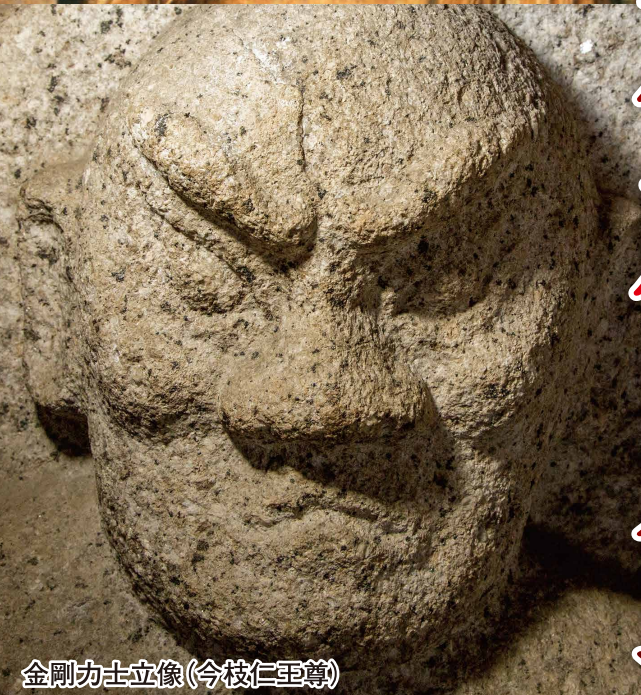




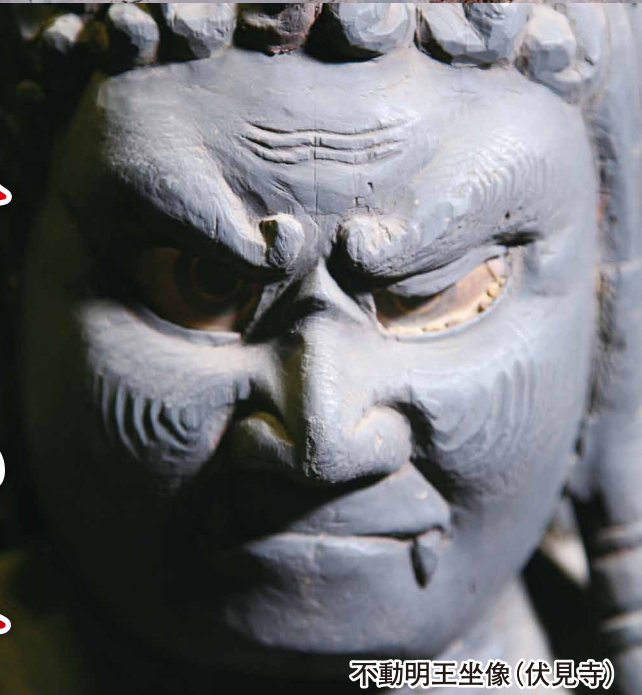
阿弥陀如来坐像(浄安寺)



不動明王立像(持明院)



金剛力士立像(今枝仁聖尊)



不動明王坐像(伏見寺)



多聞天立像(観音院)



持国天立像(観音院)

探訪 金沢の仏像
指定文化財と金沢大仏

はじめに
用語解説

【金沢市指定文化財】

- 一 銅造菩薩立像 西光寺
 - 二 銅板鑄出仏 三小牛ハバ遺跡
 - 三 木造不動明王坐像 伏見寺
 - 四 木造不動明王立像 持明院
 - 五 木造持国天立像 観音院
 - 六 木造多聞天立像 観音院
 - 七 石像金剛力士立像 今枝仁王尊
 - 八 木造日蓮聖人坐像 本興寺
 - 九 木造仏涅槃像 法船寺
 - 【金沢大仏】
 - 一〇 阿弥陀如来坐像 浄安寺
 - 一一 阿弥陀如来立像 玄門寺
 - 一二 釈迦如来立像 蓮昌寺
- 掲載寺院などの位置図

はじめに

「仏教伝来と古代寺院」

日本に仏教が伝来(公伝)したのは、『日本書紀』によれば欽明一三年(五五二)と記されていますが、実際にはそれ以前の六世紀前後頃とされています。仏教の信仰や普及の場となる寺院は、蘇我馬子が崇峻元年(五八八)に建立した飛鳥寺が最古とされています。これ以後、近畿の有力豪族らが寺院を建立し始め、七世紀末頃までには東北地方から九州地方までの全国各地に約六百ヶ寺が建立されました。石川県では七世紀中葉に初めて寺院経営が行われ、後半には南加賀、北加賀、口能登、中能登で盛んに造営されます。そのひとつに野々市市末松廢寺があります。七世紀後半に建立され、平安時代前期まで継続します。

「金沢の寺院」

金沢市内では高岡町遺跡で飛鳥時代の小規模な寺院

があった可能性が指摘されています。また、森本の観法寺町には七世紀後葉の瓦窯が発見され、生産された瓦は金沢二一世紀美術館で発見された広坂廢寺に葺かれていたことがわかっています。この広坂廢寺は七世紀後半から一一世紀にかけて営まれた寺院とされ、瓦の特徴は平城宮式であることから、中央政権との関係が強い寺院であったと考えられています。

金沢市南部の銅板鑄出仏(本書所収)が出土した三小牛ハバ遺跡は奈良時代から平安時代前期の山林寺院跡ですが、文献資料によると平安時代に同地区の高尾町には真言宗系寺院の「高尾山寺」が、四十万町善性寺のある山手には天台宗系寺院の「止観寺」などの山林寺院があり、僧の修行の場と考えられています。

現在、金沢城下には金沢城を囲むように卯辰山山麓寺院群、小立野寺院群、寺町寺院群があり、江戸時代(一七世紀末頃)には二四〇もの寺院がありました。多くの寺院は藩主家、加賀八家などの上級武家などが競うように檀家となり、盛んに建立されました。それ以前の中世では、鎌倉時代以降に中国の禅宗系の曹洞宗寺院(浄住寺、放生寺など)、臨済宗寺院(國泰寺、傳燈寺など)の鎌倉新仏教が伝わり、南北朝時代には法華宗(日蓮宗)寺院(本興寺、宝乗寺など)が金沢北部の森本三谷地区に集中して建立されます。浄土宗から分かれた真宗(一向宗)は、本願寺蓮如が吉崎に御坊を建てて北陸における布教活動を開始すると急速に拡大し、蓮如やその弟子たちにより創建された寺院が増加します。古代にまで遡ると真言宗や天台宗などの密教系寺院が盛行しますが、伏見寺や持明院など現在にまで法灯を継ぐものは少ない。

「金沢の仏像」

仏像とは仏陀の像のことで、礼拝対象の仏陀の彫刻や画像を指しますが、通常は仏の彫像とし、画像は仏画と呼びます。また、仏像は仏陀、つまり如来の像を意味しますが、日本では菩薩・明王・天部などを含めて捉えています。

石川県の仏像は、最古の例が飛鳥時代の金銅仏(能登町薬師寺の銅造如来仏及両脇侍像)とされ、奈良時代の例は三小牛ハバ遺跡出土仏、平安時代初期では伏見寺の阿弥陀如来坐像があります。木彫仏は平安時代から残されてお

り、前期(九世紀)は少なく、後期(一〇〜一二世紀)から増加し、鎌倉時代以降江戸時代のものが多いとされています。

本書は、令和三年度までに金沢市の文化財に指定された仏像九件と金沢大仏三件を紹介するものです。指定文化財は古代六件、中世二件(一件は祖師像)、近世一件があります。金沢大仏はいずれも近世のものですが、古代から近世まで各時代の様々な材料で造像された仏像をあげることができました。仏像の来歴をみると元から金沢に在ったもの、何らかの事情により金沢に移座したものがあります。西光寺の菩薩立像と持明院の不動明王立像はいずれも富山県から、今枝仁王尊金剛力士立像は滋賀県からそれぞれもたらされました。なお、西光寺の仏像は材料の分析から朝鮮半島で制作された「渡来仏」の可能性が高いと指摘されています。

また、指定されていませんが金沢には数多くの仏像が残されています。古代では片町養智院の「地藏菩薩立像」、幸町法幢寺の「十一面観音菩薩立像」、石引波着寺の「十一面観音坐像」、山の上町心蓮社の「聖観音菩薩立像」、二日市町誓入寺の「大日如来坐像」、観法寺町の「聖観音菩薩立像」、中世では傳燈寺町傳燈寺の「釈迦如来坐像」、石引宝円寺の「金剛力士立像」、文殊菩薩坐像などをあげることができます。近世では金沢大仏以外にも数多くの仏像があります。

本書で取り上げました仏像から金沢の仏教文化を理解すると共に、日本の仏像の歴史を学習することができます。最後に、仏像は信者の方々にとって大切な信仰の対象です。信仰の有無に関わらず、敬意をもち、礼節をわきまえて寺院の約束事に従い、機会がありましたらご拝観願います。

参考文献

- 金沢市『金沢市史一六 美術工芸』平成一三年
田中ひろみ『仏像イラストレーターがつくった仏像ハンドブック』ウエッジ 令和二年
北陸古瓦研究会『北陸の古代寺院―その源流とふる瓦―』桂書房 昭和六二年
真鍋俊照編『日本仏像事典』吉川弘文館 平成一六年

足ほど 立像を台座上に取り付けるため、足の裏に設けた凸部。台座に同型の凹部を設け、差し込み固定する。
 厚肉彫り(あつにくぼり) 高肉彫りともいう。石仏などを原石から立体的に彫り出す技法。

一木造(いちぼくづくり) 一本の木から頭部と胴部の主要部を彫り出す技法。腕、両脚部などは別材が多い。
 内割(うちくり) 木彫の内部を削り抜き空洞とする技法。木心を含む材があると干割れが生じるために行う。

押出仏(おしだしぶつ) レリーフ状の凸型(原型)の上に薄い銅板を当てて槌で叩きレリーフを写し出したもの。
 懸仏(かけぼとけ) 円形の鏡などの表面にレリーフまたは丸彫りの仏像を表現したもの。平安時代末期に出現し、鎌倉・室町時代に多く制作された。

花崗岩(かこうがん) 深成岩の一つ、マグマが冷えて固まった岩石。石英・長石を主成分として他に黒雲母を含む。別名「御影石」、「白川石」とも呼ばれる。
 肩喰(かたくい) 肩に施される獅嚙。

玉眼(ぎよくがん) 木彫像で、削り抜いた目に、瞳を描いた水晶を入れ、和紙または綿で押さえて現実感を出す技法。鎌倉時代に盛行する。
 後補(こうほ) 後世の補修。特に仏像の腕から先、衣の先、持物などは経年劣化し易いため多く行われる。

衆生(しゅじょう) 生命のあるすべてのもの。
 裾(くす) 仏・菩薩・天部などが腰から下に纏う布。
 結跏趺坐(けつかふざ) 仏像の座り方の一つ。両脚を組み、両足裏を上に向けて座る。

絹索(けんさく) 鳥獸を捕らえるための縄。転じて衆生救済の意味をもつ。
 胡粉(こぶん) 顔料の一つ。かつて中国の西方を意味する胡から伝えられたことから胡粉と呼ばれる。古くは鉛白(塩基性炭酸鉛)を指した。

西光寺(さいこうじ) 弘仁九年(八一八)伝教大師最澄が中興の寺院で、元龜二年(一五七一)に織田信長の兵火にあい焼失した。鎌倉時代の宝篋印塔(ほうきょういんとう)と室町時代(応永二八年・一四二二)の石燈籠が重要文化財に指定され、金剛力士像は室町時代初期とされている。

挿首(さしくび) 頭部を別材で造り、体部に挿し込む技法。
 三叉戟(さんさげき) 古代中国の武器の一つ。両方に枝が出た三つ又の矛。

三道(さんどう) 仏像の首にある三本の皺。
 獅嚙(しかみ) 靈獸獅子が齒を噛みしめると顔がしかむことから力強さを表す。肩部は肩喰、腹部は帯喰。

漆箔(しつぱく) 漆塗りの上から金箔をつける技法。
 舍利塔(しゃりとう) 仏舎利を納める塔。仏塔を意味するが、中国・日本などでは室内に安置する仏塔形の小型の工芸品を指すことも多い。後世、水晶珠など小粒の硬い石を納め、仏舎利と同様に尊崇した。

条帛(じょうはく) 肩から腰脇に斜めにかける布。
 上品下生(じょうほんげしょう) 親指と人差し指で輪をつくり、右手を上げ左手を下げる。

瑞像(ずいざう) めでたい様福々しい様を描いた像
 垂髪(すいはつ) 菩薩像や天部像などの仏像で、肩まで垂れた髪のこと。
 厨子(ずし) 仏舎利塔や経巻など貴重品を収納し、寺院内に安置される調度。仏殿や宮殿を模した小建築。

施無畏(せむい) 右手を上げて手を開いて指を伸ばして掌を見せ、左手は下に垂らす。
 総髪(そうはつ) 伸ばした髪を束ねた髪型。
 頂蓮(ちようれん) 頭頂部に載せた蓮華を表した飾り。

通肩(つうけん) 両肩を袈裟で覆うこと。
 天蓋(てんがい) 仏像などの上にかける笠状の装飾。方形・八角形・円形などに作られる。
 転石(てんせき) 大きな岩から離れて、流水などに押し流された石。

天衣(てんね) 両肩から手首や腕に巻き付けるようにかける細長い布。
 中子(なかご) 中空、中心とも書く。蜜蠟鑄造(みつろうちゅうぞう)に用いられる。造られるべき像の中空部に相当する部分。土で作られることが多く、その上に蜜蠟(ミツバチから採集したロウ)を盛って原型を作る。その後、外側に土を被せて固めて外型とし、乾燥後に焼いて蠟を溶かし、生じた隙間に溶銅を流し込んで鑄造する。

鈍彫り(なたぼり) 表面に丸鑿(まるのみ)の彫り痕を残した木彫。平安中期から鎌倉初期に関東から東北にかけて多く見られ、未完成のものとする説もあるが、仏像彫刻の様式と考えられる。

念持仏(ねんじぶつ) 日常的に携帯し礼拝する仏像。
 衲衣(のうえ) 僧が着る服。布を縫い合わせて作った衣。矧ぎ付ける(はぎづける) 別に作った材を接合すること。接合は、ほぞ差しやにかわ・漆などの接着剤を使用する場合がある。

臂釧(ひせん) 二の腕につけている飾りの輪。
 別当(べつどう) 神社の境内に置かれた寺院で神社の経営管理などを行う。神仏分離令により廃絶された。
 偏袒右肩(へんだんうけん) 右肩を肩脱ぎし、左肩のみを覆うこと。

宝剣(ほうけん) 魔や煩惱を払い、迷いを断ち切るた剣。
 宝珠(ほうじゆ) 宝とすべき珠。
 宝塔(ほうとう) 仏塔で、円筒形の塔身に方形の屋根のせ、その上に相輪(金属製の装飾)を立てたもの。
 弥陀定印(みだじょういん) 膝上で両手の親指と人差し指で輪をつくり、背をあわせる。釈迦の瞑想中の姿。
 無垢像(むくぞう) 中子のない像。
 室鳩巢(むろきゅうそう) 寛文一二年(一六七二)に五代藩主前田綱紀に召し出され、京都の木下順庵に学び、後に藩儒となる。元禄三年(一六九〇)長町に居住。正徳元年(一七一二)新井白石の推薦で幕府の儒員となり、八代將軍徳川吉宗に講義した。

裳(も) 下半身を覆う衣。
 木芯乾漆(もくしんかんしつ) 木の原型に木の繊維や木粉などの木屑(こくそ)と漆を混合させたもので細部を整えて造る技法。
 髻(もとどり) 伸ばした髪を束ねた髪型。
 矢穴技法(やあなぎぼう) 大きな岩にミシン目のように穴を穿ち、そこに矢(鉄製のクサビ)を打ち込み、石を割る技法。鎌倉時代に中国大陸から伝えられました。
 瓔珞(ようらく) 仏像の天蓋につける垂れ飾り。
 寄木造(よせぎづくり) いくつもの木材を矧ぎあわせて仕上げる方法。平安時代の中頃から始まる。
 螺髻(らほつ) 如來の髪型で、小さな右巻き渦巻き貝のように並んでいる。

腕釧(わんせん) 手首につけている飾りの輪。

一 銅造菩薩立像

どうぞうぼさつりゅうどう

時代 飛鳥時代(七世紀後半)

総高 三〇・〇センチ(台座込)

所在地 金沢市暁町一八番三八号

所有者 西光寺(真宗大谷派)

指定年月日 令和二年一月三十一日

拝観時の注意 毎年五月下旬頃の宝物虫干会で展示

連絡先 〇七六一二六一―二九九七



左斜め



右側面

西光寺は、文明年間(一四六九〜一四八七)に石川郡室江(現金沢市諸江か)で開かれ、天正八年(一五八〇)現在地に移転した。明治二五年(一八九二)住職の祖母が富山県宮島村(現小矢部市)から西光寺に嫁ぐ時に本像を持参したと伝わり、現在まで「お内仏」として護持されてきた。

本像は小金銅仏で、色調は緑青色。台座のみに中子(なかこ)を使う他は全形を無垢(むく)に铸造し、鑄肌の荒れは著しく後年に被熱したものと考えられる。そのため面貌はザラザラとし、表情の観察は困難であるが、微笑んでいる様に見られる。

像容は腹部をわずかに突き出し、背中を丸めて前で両手を組み、大きく長い両足指を揃えて台座上に立ち、側面は扁平で、この時代の特徴をよく示している。頭部に山形の宝冠を被り、垂髪(すいはつ)は長く耳の後ろから両肩に掛け、胸を二条の連珠で飾り、肘を曲げてお腹の前で両手を組み合わせた「宝珠棒持」の姿勢をとる。両肩に掛かる天衣(てんね)は膝前辺りで上下二段に垂れた後に両肘に掛けて蓮華座に至り、垂れ先が手前に向かって曲がる。裾(くん)は高い位置に帯を締め、その帯は正面中央で蓮華座まで垂れる。後頭部のほぞ孔は、光背(こうはい)で装飾されていたことがわかる。

制作年代はその特徴から七世紀後半と考えられ、市内にある最古の仏像である。制作地は朝鮮半島との関連性が推定され、「渡来仏」の可能性が高い。また、鳥取県大山寺所蔵の銅造十一面観音立像(重要文化財)と像容がよく似ていることから「兄弟仏」の可能性が指摘されている。



墨書土器「三千寺」



三小牛ハバ遺跡全景



正面

二 銅板鑄出仏

どうばんちゅうしゅつぶつ

時代 奈良時代(八世紀)

総長 一九・二センチ

所有者 個人蔵

指定年月日 令和三年三月三十一日

なお、レプリカを金沢市埋蔵文化財収蔵庫

(金沢市新保本五丁目四八)で展示

連絡先 〇七六一二四〇一三三七

銅板鑄出仏は、金沢市南東部の三小牛町(みつこうじまち)に所在する三小牛ハバ遺跡で昭和二六年(一九五二)に発見された。この像は当時、鎌倉時代の懸仏(かけほとけ)とされていたが、同一年に石川考古学研究会の桜井甚一氏が奈良時代の銅板鑄出仏と再評価された。近隣には和同開珎五八〇枚以上が発見された三小牛サコ山遺跡があり、この遺跡と併せて宗教的遺跡群と評価される。

三小牛ハバ遺跡は、急崖に囲まれた凹地に平坦面が造成され、崖下をL字形の大溝で区画された空間地に掘立柱建物、竪穴建物などが確認されている。出土品から八世紀後半から一〇世紀初頭にかけて寺院は営まれ、「三千寺」の墨書土器を始めたとする仏教関連遺物によって、山中で修行が行われた山寺「三千寺跡」とわかった。

本像は、三千寺跡の中央付近から出土したとされている。不整形な銅板中央部に、像高一二センチの仏像を鑄出する。左肩から法衣を纏い、左手を胸にあげ、右手を垂らして蓮台に直立する。背部は舟形後背で装飾し、上部には瓔珞(ようらく)の下がる天蓋(てんがい)があり、その天部中央に宝珠が置かれている。鑄上がりが悪いため、頭部の輪郭や面相が不明瞭で、如来か菩薩かの判断が困難(如来の可能性が高い)であるが、八世紀頃とされる奈良唐招提寺の銅板押出如来立像に類似している。また、このような凶像は中国の唐代に流行した瑞像(ずいざう)の影響と評価されている。本像は「仏像型」と言われる押出仏(おしだしぶつ)の原型に多いが、鑄上がりが悪いため僧徒の念持仏として礼拝の対象と考えられる。



正面



右側面

三 木造不動明王坐像

もくぞうふどうみょうおうざぞう

時代 平安時代(九世紀後半〜一〇世紀)

像高 八五・六センチ

所在地 金沢市寺町五丁目五番二八号

所有者 伏見寺

指定年月日 平成二六年一月一四日

拝観時の注意 法要のため拝観できない日があるため事前確認

認要(土日・祝日可)

本堂内は撮影禁止、拝観料 大人・大学・高

校生五百円、中学生以下無料

連絡先 〇七六一二四二二二八二五

行基山伏見寺は、奈良時代の養老元年(七一七)石川郡伏見に創建されたと伝わる真言宗寺院である。元和元年(一六一五)現在地に寺地を賜り、建立された。本尊の阿弥陀如来坐像は平安時代初期の全国的に数少ない金銅仏で国重要文化財に指定されている。平安時代末期に属する多聞天と持国天が護る本堂奥の護摩堂壇上に不動明王坐像がおわす。赤彩が残る立体的な火焰光背を付け、制陀伽(せいたか)、矜羯羅(こんがら)の二童子を従える。

不動明王は密教の大日如来の化身として忿怒(ふんぬ)の姿で衆生(しゅじょう)を教化する最も威力のある明王である。本像は、櫃(かや)の一木造で像高八五・六センチ、頂蓮(ちようれん)を除く頭頂・左肘・体部地付までを一材で彫出し、内剣(うちぎり)は施さない。総髪で正面の髪を巻毛にし、頭上に八葉の蓮華花紋の頂蓮(ちようれん)を彫出し、髪を束ねて左胸に垂らす。額と頬に皺(しわ)を刻み、右目を開き、左目を細める「天地眼」は張玉眼(後世の改変、元は彫眼)とし、上下に歯牙(しげ)を出す頸には三道を刻出し、条帛(じょうはく)に裳(も)を纏い腕釧(わんせん)と臂釧(ひせん)を彫出する。右手に宝剣(江戸時代の後補)、左手に羂索(けんさく)(後補)を持ち、右足を前にして結跏趺坐(けっかふざ)し、磐座(いわざ)(江戸時代の後補)に座す。腰脇の衣紋(えもん)は薄手で鋭く古様の特徴がみられることから、九世紀後半から一〇世紀に造られたと考えられる。



左斜め



左側面

四 木造不動明王立像

もくぞうふどうみょうおうりゅうぞう

時代 平安時代(九世紀後半〜一〇世紀)
像高 一五六・五センチ

所在地 金沢市神宮寺三丁目一二番一五号

所有者 持明院(蓮寺)

指定年月日 令和四年三月二二日

拝観可能日 正月一・二日、蓮寺不動明王縁日春季茶会(有料)五月二七日、寺院大祭・蓮寺不動明王縁日

秋季茶会(有料)一〇月二七日、妙蓮拝観期間

七月二八日とライトアップの二日間(有料)

通常拝観 (本堂)要予約 拝観料志納

(境内)随時 山門開口時無料

連絡先 〇七六一二五二一三八二七

白鬚山持明院は真言宗寺院で、永長年間(一〇九六〜一〇九七)石川郡安江村にて創建されたが中絶し、寛永年間(一六二四〜一六四四)に再興された後、万治二年(一六五九)木ノ新保村に移転したとされる。元は白鬚神社の別当(べっとう)であったが、神仏分離令により明治三年(一八七〇)に社地と寺地が分離され、金沢駅前拡張計画に伴い、昭和四六年(一九七

一)現在地に移転した。
不動明王は大日如来の化身として、五大明王の中心である。本像は榿材の一木造、眉根を寄せ、両目を見開き、上下に歯牙を突き出す忿怒の相で、右手に剣、左手に索を持ち、磐座に立つ。胸や腹部の豊かな肉付き、上体を左に傾け、条帛・裳の衣紋は太く深く立体的に彫出され、力強く堂々とした体軀を示す。巻髪で編んで束にした髪を左肩に垂らす。臂釧・腕釧・足釧などで装飾された姿態は豪華で品位が感じられる。制作技法から九世紀後半から一〇世紀に造られたとみられる。

本像は元二上射水神社(富山県高岡市)に伝わっていたが、明治一一年(一八七八)持明院へ移座した。なお、同院には裏千家流祖・仙叟居士が逗留した一草庵と初代宮崎寒雉の墓があり、裏庭には県指定天然記念物「妙蓮」が生息する。



正面



面相部左側拡大



右肩喰部拡大



獅嚙部拡大

持国天像は唇を結んで両目を怒らす憤怒の相を示し、両目と唇を彩色、右手を腰に当て、左手を振り上げ、左に腰をひねり、右足を上げて邪鬼の上に立つ。左手の持物(じもつ)は失われているが、宝剣と考えられる。構造は寄木造で、頭体は挿首(さしくび)、列木で両肩をつけ、内剣を施す。面相部は再加工が施されているが当初材で、髻(もとどり)は旧像のままと考えられる。左右の手首から先・左天衣・後方右の裳裾(もすそ)は後補である。全体として優美な曲線をもち、憤怒形でありながら彫りが浅く、平安時代後期の制作技法をよく残す。煙か、お香のためか、像は黒光りし、筋肉の逞しさだけでなく、凛々しくそして優しさも、垣間見えるような気がする。

長谷山観音院は真言宗寺院で、歴代藩主の祈禱所であった。慶長六年(一六〇一)二代藩主前田利長が小立野の愛宕明王院を卯辰山の一角に移転させた時に、本地仏観世音の安置所として明王院の隣地に建てたことが始まりである。同一八年、三代藩主前田利常の娘鶴亀の宮参りの際、境内が手狭であったため、元和二年(一六一六)利常室によって新たに愛染院・醫王院の二寺が整備された。明治元年(一八六八)神仏混淆廃止に伴い、仏具などを醫王院へ移した。

十一面観世音菩薩立像(秘仏)を守護するため、「四天王」のうち、北方を守る多聞天像が右側に、東方を守る持国天像が左側に仁王立ちする。

時代	平安時代後期(一一世紀後半～一二世紀初頭)
総高	一一五・〇センチ
所在地	金沢市観音町三丁目四番二号
所有者	観音院
指定年月日	平成二十七年四月一三日
拝観時の注意	寺院に連絡必要
連絡先	〇七六一二五二一六五二三

五 木造持国天立像

もくぞうじこくてんりゅうどう